

# 子供建築学校『未来のいる場所 project 1999』 の実現過程と成果について

## On the Realizing Process and the Results of the Architectural Workshop for Children “The Project 1999 : One Place in the Future”

六反田 千恵\*  
Chie Rokutanda

### 1. 序

1999年8月5、6日に豊春地区公民館にて『未来のいる場所 project 1999』という小中学生向けワークショップを住居学科2年生が主体となって開催した。これは、住居学科2年の「特別研究」(通年・必修科目)の一環として実施したものである。「特別研究」にこうした社会性のあるプロジェクトを持ち込んだのは、現在の教育や社会の状況に対する疑問があったからである。「特別研究」は、各学生の自由研究を教員が補佐・指導する形でまとめていくというもので、いわば卒業論文に相当する科目となっている。より高密度な内容にするために、学生達を17~20人程度のグループに分け、各グループ毎に専任教員が一人つく少人数制を採用している。学生達が自らテーマを探し—おそらくは初めて—主体的に取り組む研究科目ということになる。したがって、1週間1回計30回のプログラムではあるが、2年間の短期大学カリキュラムの中で唯一、学生が主体的に研究できる科目という意味では、その教育的意義はその形式よりも高いといえるだろう。

しかしながら、現代の日本の教育状況から見ると、義務教育から高等学校教育に至るまで、学生の独創性や主体性を育むためのシステムは

決して十分ではない。従来、こうした側面を補完してきた中学校・高等学校でサークル活動・生徒自治会など学生の主体的活動の場も衰退していく傾向にあるようである。こうした高等学校までの教育の場の変容は、大学においてもサークル活動や文化祭などが不活発になっていく傾向となって、目に見える形で現れている。もちろん、こうした明確な形だけではなく、学生の学習態度・生活態度など目につきにくい部分にも消極的・受動的傾向として現れているように思われる。建築教育の現場から実例を引けば、4年制大学建築学科などでは、下級生が上級生の課題を手伝ったり、製図室に集合して学生同士で議論をしながら課題を進めていったりすることによって、相互に刺激しあい、自主的に学習していくという伝統がほとんど消滅しつつある。

一方で教育の現場と実社会の乖離という問題も深刻化してきているように思われるが、これは義務教育であろうと高等教育であろうと専門教育であろうと、その存在価値自体に関わる問題である。この問題は、家族関係・家庭の在り方の変化、バブル崩壊後の長期化している不況の影響も背景にあると思われるが、社会全体の教育力の低下・それに伴う新卒者に対する要求水準の上昇という問題と深く関わっているよ

\*住居学科

うに見える。再び建築教育の例を挙げれば、CADが操作できるということは、この2、3年間ほどの間にひとつの雇用条件のようになってきつつある。日本の大学・短期大学で本格的にCAD教育をカリキュラムの一環として実施するようになってきたのはおそらくこの5年位のことである。ごく単純にこの点だけを取り上げて、現在就職を探そうとする学生は、5年前の学生に比べて、教育期間は同じであるにもかかわらず、CADの操作を身につけるという付加条件を背負っていることになる。

教育と社会状況の乖離という問題は、しかしこうした技能水準的な問題にはとどまらないように思われる。現在の日本の教育は、生徒・学生の主体性・独自性に多くの期待をしていないように見える。高等学校教育、ひょっとすると大学教育まで、教師に言われたとおりに課題をこなしていけば問題なく過ごしてしまえる。しかし、いったん社会に出ると積極的・主体的に仕事に取り組んでいく姿勢が要求される。良い社会人像と良い学生像の間にギャップがあるのではないだろうか。こうした倫理観・責任感といったソフトな問題は、教育のシステムだけでは解決できないかもしれないが、現在多くの学校・カリキュラムが社会に対して「閉じている」傾向が問題を助長していることは疑いえないように思われる。

「開かれた学校」というキャッチフレーズには、地域社会との関係がひとつの要素として含まれている。ひとつは、地域公開講座のような形式が実施されているが、その実施方法は、こうした公開講座は、学外者向けに講義をすといったもので、地域の情報・知的活動の核と呼ぶにはまだ遠い。これからさらに地域社会のより強い結びつきが大学にとっての大きな課題となる。春日部市は昨年度、都市計画マスタープランをまとめたが、その中で、人材育成・コミュニケーションがまちづくりのポイントのひとつにあげられている。こうした状況化で短期大学はどんな事ができるだろうか、という疑問もあった。

また、一方で都市・建築・住宅に関する教育プログラムを短期大学で担当している者としては、こうしたプログラムをもう少し、若いうちから学んだ方が良いのではないかという感触もあった。デザイン・設計という行為は人間の持つあらゆる能力や技術・知識を駆使する総合的な行為である。大学に入学する年齢ではややもすれば感受性や知識の吸収力が衰えはじめている。人格が形成されはじめ、最も柔軟な思考力と吸収力を保っている時期に学習しないと間に合わないケースが多いのではないだろうかという感触を現場からは受けるのである。これは現在の日本の教育体制全体に関係してくるが、よくいわれるようにもっと創造的なプログラムを小・中・高等学校で組んでいく必要があるのではないだろうか。

さらに言えば、近年の地方分権化にともなう「まちづくり」ブームや環境問題の深刻化を背景に考える時、都市・建築・住宅などの領域は一般的に工業高校ないし大学以上で学ぶ専門分野として位置づけられているが、いわば人間が生きていく環境そのものを形成している都市・建築・住宅について、社会の構成員全体が基本的な理解を持っていないといけなのではないだろうかという疑問も湧く。例えば、小学校や中学校などの義務教育段階で算数・国語・歴史などのように学べるというようなプログラムは作れないものだろうか。

こうした幾つかの方向からの疑問が集まったところに、「子供建築学校」のワークショップを実施する動機があった。以下に概要・実施過程・実施状況などについてレポートする。なお、第3節は、杉田幸恵（共栄学園短期大学住居学科2年、「子供建築学校」担当グループ代表）との共同執筆である。

## 2. ワークショップの概要

計画・準備期間：1999年4月～8月

実施期間：1999年8月5、6日

会場：豊春地区公民館2階アトリエ・会議室

参加者：12名（春日部ボーイスカウトの皆さん）

協力：城戸崎和佐（建築家）

田井幹夫（建築家）

竹池好古（建築家）

香田寛美（春日部市）

山田豊（春日部ボーイスカウト分団長）

鈴木達也（武蔵野美術大学建築学科4年）

小田切玲奈（武蔵野美術大学建築学科4年）

堀井理恵（武蔵野美術大学建築学科3年）

\*他、春日部ボーイスカウトの連絡協議会会長・山崎哲男氏はじめ、第10団までの各分団長に、参加者への呼びかけ・資料配布などご協力いただいた。

後援：春日部市都市計画課

「未来のいる場所研究所」コアスタッフ：

杉田幸恵・小川郁・池田友子・伊藤洋人  
（以上、共栄学園短期大学住居学科2年）

協力スタッフ：勝浦誠・黒沢英弘・池内久美子  
（以上、共栄学園短期大学住居学科2年）

アシスタントスタッフ：

生野慎一・関口直之・山崎あゆみ・井上由香  
（以上、共栄学園短期大学住居学科2年）

企画主旨：

「未来のいる場所」projectは、大学などの専門課程に進む前の若い世代の人たちにも、建築や都市のことについて知ってもらったり、興味を持ってもらうための2日間のワークショップである。「建築や都市のこと」とはつまり、わたし達の生きている環境そのものなので、大学で専門として選択した数少ない人たちだけではなく、どんな人でもある程度の興味や知識を持っていてもいいことである。そのためのきっかけとなってくれればいいと思う。

ワークショップの参加者は、自分達の住んでいる春日部の地図を探索し、そのうえに散りばめられている様々な要素を取り出し、それらがどんな役割をしているのだろうか、どうして必要なのか、もっとこんなふうになっていたっていいんじゃないか、などとディスカッションを

しながら、生活の在り方とモノとしてそこに在る都市の関係について考える。そして、地図の上や普段の生活の中ではあんまりお目にかからないインフラストラクチャーがどうなっているのかというレポートを聞いたり、古今東西の建築や都市のありようを見ながら、「都市の未来」について考え、それを模型にする。

模型はそれぞれにテーマを決めて参加者が1人ずつ「勝手に」作っていく。この時、模型の土台を特定のプロポーション・寸法の台形に限定しておく。それぞれが完成した時に、この台形は、円形にも線形にもならべ換えることができ、様々な都市の要素が並べ替えやグルーピングによって関係を変え、都市全体の有様も変えていくという一種のシュミレーション・ゲームの仕掛装置となる。

現代もそうだが将来にわたっても、「コミュニティ」の再構築は日本社会の大きな課題となるであろう。また、なんらかの新しい「コミュニティ」の関係や形態を考え、実現していくことが、環境問題から教育問題、家庭問題、などを解決していく上でもキーポイントとなってくると思われる。

「未来のいる場所」プロジェクト自体は、たった二日間の短いワークショップだが、子供達に建築・都市のことについて触れる機会を作るといふプロジェクトは、今後もいろんな形で継続していきたいし、同じような考え方を持っている人たちとも積極的に協力したいと思っている。（以上、「未来のいる場所 project1999」企画書より）

### 3. 実施までの準備過程

この企画の直接的な契機となったのは、設計製図の非常勤講師としてきていただいている建築家・城戸崎和佐先生の提案である。3月19日の共栄学園短期大学卒業記念パーティーの席でご一緒した際に、まちづくりの仕事をしていても建築・都市の話になるとなかなかまちの人たちの理解が得られない、子供のうちから建築や都市の環境などについての理解を育てていく

必要がありますね、というようなお話を頂き、「子供建築学校」をなんらかの形で実施しているという運びとなったのである。以下に、やや煩雑であるが、実施までのプロセスを紹介する。

3月19日：共栄学園短期大学卒業記念パーティー：城戸崎・六反田

●城戸崎先生より「子供建築学校」の提案を受ける

「子供達に建築の話をしに行くボランティア（仮に子供建築学校と呼ぶことにした）」について、城戸崎先生から御提案があり、早速できるかどうか可能性を探ってみることになった。

3月26日、3月31日：E-mail：香田（春日部市）→六反田

●「子供建築学校」について香田さんに相談。個人的にアドバイザーとして協力していただくことになる。

4月2日：E-mail：城戸崎（呼びかけ）

●「子供建築学校」の呼びかけ

「子供建築学校」に関連するワークショップをやっていたり、実際にやってみたいと思う人たちが一度集まって話をし、協力の可能性を探ることになる。

4月14日：顔合わせ：池田・伊藤・小川・杉田（以下コアスタッフ）

●コアスタッフ決定・代表杉田幸恵

「子供建築学校」をやってみたいという学生が4名（杉田幸恵、小川郁、池田友子、伊藤洋人）集まる。連絡網／名簿作成。次回のミーティングまでにどんな企画をやりたいか内容をそれぞれが考えてくることになる。

4月18日：顔合わせ：城戸崎他7名の若手建築家、六反田

●若手建築家達と情報交換

各人が携わっているワークショップや子供向けの企画などの情報交換、長い目で、建築・都市についての興味・理解を持つ子供達を育てていければ、というような話になる。

4月20日：打合：コアスタッフ

●ワークショップの内容について話し合う。参加

者に秘密基地を作ってもらおうという案がまとまる。

4月27日：打合：コアスタッフ

●企画内容の再検討

秘密基地は安易すぎるので、次のゼミ（5月7日）までに何をやるのか各自で考えてくることになる。

5月6日：打合：コアスタッフ

●企画の決定。子供達に未来都市をつくってもらおう。プロジェクト名を「未来のいる場所」とする。

方法として地形模型とを作り、それを4分割にして、中心を公共の場・自分たちの都市とする。参加者を4グループに分けて、どのグループで何をやるのか決める。未来を予測させる方法として、未来を感じさせることの出来るビデオ、建築のスライド等を見せる。その後に子供たちに未来のスケッチをしてもらい、それを元に模型作成。一度好き勝手に作ってもらい、地形模型の上に勝手に模型をおいてもらう。その後、環境などについて考えてもらい、模型の場所移動、修正をして完成。企画書を作るに当たって、このワークショップに参加してくれる人達のメリットを考え、コンセプトを作る。また、対象は小学生とし、この模型が出来上がったら心理学者を呼び、心理学的に現代の子供は何を考えているのか統計を出し、PTAに配る、などの方針が出た。企画書の作成をはじめ。

5月7日：打合：コアスタッフ・六反田

●第1次企画書第1案（小川案）について

第1次企画書第1案（小川案）について、企画書の書き方が、誰に向けたものか、目的や項目の整理をやり直すことになる。

5月9日：E-mail：香田→コアスタッフ・六反田

●香田さんからワークショップの運営についてアドバイスを頂く。

子供建築学校進行状況とアドバイスをお願いをした香田さんからワークショップ形式が良いのではないかとアドバイスと、春日部市の参考事例を教えてください。

5月17日：第1次企画書第2案（杉田）

この方針で第1次企画書をまとめることに決定。

5月18日：第1次企画書第3案（池田）手直し。

●「未来のいる場所研究所」という名称決定。

5月20日：打合：香田・コアスタッフ・六反田

●第1次企画書について香田さんからアドバイスを頂く。

第1次企画書決定案を香田さんに見せる。問題点として、都市を作らせたいのか、建築を作らせたいのか。建築は個々のものであり、都市計画になると全体になるのだから、どちらかに絞るべき。未来を作らせるならば、時間軸はいつに設定するのか。時間軸が広いと参加者の考えがバラバラになる可能性がある。参加者、協力者、そして運営者にはこのワークショップを通じて何が残るのか。もっと教育的なものを入れないと、このワークショップでは何が得られるのかわかりにくい。地形模型はリアルに作るのか。リアルに作るのであればどの土地を使うのか。ディスカッションでは何を語らすのか。空間などの話はないのか。スケールはいくつになるのか。参加者に3日間は長い。などと色々指摘されて、まだ考えなければならない問題が山積みであることを思い知らされる。

\*備考：ワークショップの対象として、小学校などは難しいので、春日部市のボーイスカウトの子供達が良いのではないかと提案を頂く。

\*埼玉県の実施した環境共生住宅を考えるワークショップのビデオを貸していただく。学校に戻り、ビデオを全員で見ると。確かに埼玉県のワークショップは環境共生住宅というものを子供達に教えるのに良いプログラムだが、やや啓蒙的すぎて、子供達の建築的発想を制約しているのではないかと、「子供建築学校」は啓蒙的なものではなく、本来的な意味で教育的なものにしたい、ということになった。教育とは、人を制約するものではなく、自由にするものではないかというような議論をする。

5月21日：打合：城戸崎・六反田・コアスタッフ

●第1次企画書について城戸崎先生よりアドバイスを頂く。

参加者たちから何を引き出したいのか。何の地形模型で、スケールはいくつなのか。面白い土地を作っても、その上に建築を建てるのは難しい。また、スケールが小さいと、参加者は建築物を認識しづらい可能性がある。場所は田舎にするのか、東京にするのか。また、地形模型にシンボリック的なものを作るのは城戸崎先生は反対で、暴力的な感じがする。

城戸崎先生の今回のワークショップの狙いは、デザインに対するサポーターを増やしたい。日本は特に公共的なデザインは乏しい。誰もがトータルな（公共）空間に参加できると思わせたい。地形模型を春日部にしてみたら面白い。春日部は郊外である。今の日本は家を出たらすぐに公共の空間である。それを利用して、集まるという切り口から公共の場を増やしていく。また、城戸崎先生の提案で、今あるまちの地図を切り取り、ラフに好きなところを入れ替えてみるのも面白いと提案された。参加者にとって3日間は長いと城戸崎先生にも指摘を受けた。城戸崎先生は今回のワークショップで参加者に残るものは結果でなく、きっかけでいいのではないかということだった。

\*備考：香田さんと城戸崎先生のアドバイスをを受け、5月24日までに一人ずつ企画書変更案を作ってくることになる。

5月21日：E-mail：香田→六反田→コアスタッフ

●春日部ボーイスカウトの分団長をなさっている、花積の丘の上教会の山田牧師をご紹介いただく。

5月22日：E-mail：山田→六反田→コアスタッフ

●山田牧師がワークショップへの協力を快諾してくださる。ワークショップの対象がボーイ達に決定。

5月24日：打合：コアスタッフ

●第1次企画書第4案について話し合う。

スケールは1/500から1/800に設定する。時間軸は20年後。時間軸が20年後に設定しているので、世界の街並みや建築家のスライド等を20年刻みで見せる。この時参加者は4グループに分け、グループごとに違うスライドを見せて、持ち味を変える。地形模型を4分割し、グリッドで分けることは変わらない。グループごとに別れて作業し、1グループに1枚、同じ大きさの紙を渡し、その上に道路を引く。前と同じように中央を公共の場とし、4隅に住宅区を作る。この時のルールとして、道路は住宅区から直線の道路は1本とし、直線以外の道路の本数は自由とする。道路に関連性を持たせて道路でまちの作り方を考えてもらう。また、居住区には家を30世帯作り、その中に生活に必要なものを1つ、集合所を1つ設ける。

5月28日：打合：池田・小川・杉田・六反田

●第1次企画書第4案の内容をシュミレーションして問題点を検討。

地図を1/500に拡大コピーして、どの程度になるのか調べる。1/500では、建築物を認識するのは難しい。ノン・スケール案がでる。参加者に2つの場所を与え、その間の地図を書いてもらう。地形模型はフラットな発泡スチロールを使用する。その他の方法として5月24日と同じ。

6月4日：打合：山田・香田・コアスタッフ・六反田

●山田牧師との顔合わせ。ワークショップの実施8月上旬に決定。

山田牧師にボーイスカウトの説明をしてもらい、ボーイという小学校5年生から中学3年生までのチームは地図が書けるという理由からボーイを対象に行うことにする。また、ボーイを対象とするならば、夏休みを利用することが最も効率がよいことから実施が夏休み(8月5, 6日)になり、全員が集まりやすいように場所は春日部市中央公民館に仮決定する。ワークショップの内容としては、あらかじめ2点を設定し、ノン・スケールで参加者に地図を書いてもらい、その地図の中には自分たちの生活に関連する建物や場などを書き込んでもらいそれらを要素として捉えて未来都市を作ることを説明する。そして、2点を設定して地図を書かせるのならば、その時に都市の説明をすること、地図を書きながら要素を拾い、それを集めてまちにするのならば、ここから参加者に何を考えてもらい、企画する私たちが何を考えてもらいたいのかということを確認にするべきだと指摘を受ける。

\*備考：参加者をよびかけるパンフレットを作成し、6月9日までに山田牧師に届けることになる。

6月4日：打合：コアスタッフ・六反田

●6月9日までのパンフレットの方針について話し合う。

山田牧師との打ち合わせの後、パンフレットをどう作るかを話し合う。課程を3つに分けて、参加者がのりやすいように指令形式にし、「MISSION」と名付ける。MISSION1では地図を書いてもらい、MISSION2ではスケッチをしてもらい、MISSION3では模型を作ることに決定する。パンフレットの作成

開始。

6月5-8日：パンフレット作成：伊藤・小川・六反田

6月7日：打合：コアスタッフ・六反田

●ワークショップで春日部市のインフラストラクチャーについて子供達に説明することになる。

都市を作ってもらうにあたって、都市のことについて考えてもらいたいことをディスカッションする。六反田先生から、現在の私たちの生活は隣近所とのコミュニケーションがあまりなく、自分たち単独で生活をしている思いがちだが、実際は巨大な共同の設備(インフラストラクチャー)によって生活が成り立っているのではないかと提案される。また、現在のコミュニティは崩壊されつつあるといわれているが、そうではなく、今の生活にあったコミュニティになっているのではないだろうか、提案される。

\*備考：参加者に最も身近なインフラストラクチャーであると思われる、ガス・水道・電気・ゴミについて調べてみるべきだという意見が全員一致する。また、そのためには新たに協力者を頼まなければならないという意見が出る。

6月9日：パンフレット・登録カード完成：コアスタッフ・六反田

●山田牧師にパンフレット・登録カードを渡し、ボーイスカウトでの配布を依頼。

6月9日：E-mail：山田→六反田→コアスタッフ

●山田牧師からパンフレットについてのご意見を頂く。

パンフレット・登録カードについての御感想と、13日のボーイスカウトのミーティングで配布する旨ご連絡を受ける。六反田から春日部ボーイスカウト連絡協議会会長の山崎哲男氏に依頼文をファックスで送ることになる。全体として内容が十分にできていないためにはじめてみる人にわかりにくいことを反省する。

6月11日：fax：六反田→山崎哲男

●「未来のいる場所」プロジェクトについてのご説明と、協力の依頼。

6月15日：打合：コアスタッフ・池内・勝浦・黒沢(この3人は以下インフラ班)・六反田

●ワークショップのために「インフラ班」を増設する。

春日部市のインフラストラクチャーについて調べてもらうために、六反田ゼミのまち作りチームに協力を依頼。まち作りチームである池内・勝浦・黒沢が協力してくれることになる。彼らに今までの「未来のいる場所研究所」(以下M研)の課程を説明し、池内にゴミ、勝浦にガス、黒沢に電気、そしてコアスタッフである小川に水道について調べてもらうことになる。また、今回のパンフレットでは十分に内容が伝わらない(内容が決まっていない?)のために、参加者(子供達)向けのマニュアルと、協力して下さる方々のための企画書を作っていくことになる。

\*城戸崎先生はじめ、「子供建築学校」に関心のある若手建築家達に、パンフレット・登録カードを送付する。

6月16日→6月24日:協力者向け企画書(第2次企画書)案作成:コアスタッフ(杉田)・六反田

6月21日:e-mail:鈴木達也→六反田

●鈴木達也氏より、ワークショップへの参加・協力を快諾のメッセージ。

6月22日:打合:コアスタッフ・インフラ班(コアスタッフとインフラ班を併せて以下M研)・六反田

●第2次企画書を作るにあたって、コンセプトと内容の見直し。

コミュニティについて、実際に江戸時代のまちの作られ方の説明を六反田先生からしてもらい、インフラがない時代は隣近所と助け合いながら生活をしていかなければ生活が出来なかったことを知る。また、まちの出来方も時代の権力者の力のあり方にも関わってきていることを知る。それをふまえた上で、MISSION 1の方法について考える。また、模型は本当に4分割でいいのか考える。

6月24日:シュミレーション:コアスタッフ・六反田

●シュミレーションによって第2次企画書の内容を検討。困難の多いことが判明。

クラフト紙にコアスタッフ4人で協力して春日部駅から共栄学園までの地図を書く。しかし、広い紙にみんなで書いていくことは困難であるのではないかとということで、A4サイズの紙に各自地図を書く。

それを重ねて1本の道をとって、クラフト紙に写し一つの地図にする。その方が書きやすいのではないかということになり、トレーシングペーパーを使った方がいいのではないかということになる。けれどもどう書いても上手く地図が書けず、また、模型のシュミレーションもしてみるが、道路の関連性が生きてこなく、途方に暮れる。

6月25日:打合:城戸崎・香田・M研・六反田

●第2次企画書について打ち合わせ。内容を全体的に見直し、第3次企画書を作ることになる。

香田さん・城戸崎先生に共栄短大まで来ていただき、第2次企画書の内容の総点検をする。企画書のままでは、子供達が作業に戸惑うなどの御指摘を頂く。

特に作業を分かり難くしている点として、建築と都市とどちらにウエイトが置かれているのかとの当初の問題点について議論が再燃した。都市と建築は不可分で、個々の建築物が都市の中にあること、複数の建築物が集まって都市を形成することを理解してもらいたいということになった。ここの建築物は各人が自由に作り、それが集まって都市を形成するというプロセスを体験してもらおうということになる。城戸崎先生の発案で、作成する模型の土台を台形にし、円形状にも直線状にも並べることが可能なようにして、その時に都市がどのようにできてくるかを最後に見てもらうことで全員が合意する。ワークショップの内容が実質的に確定し、これを第3次企画書(最終版)に反映することになる。また、会場(春日部市中央公民館)の予約が1ヶ月前にならないとできないことから、春日部市都市計画課のほうに協力を依頼し、会場を予約してもらうことになる。

6月26日→30日:第3次企画書(最終版)作成・完成:コアスタッフ・六反田

6月27日:ワークショップ当日のタイムテーブル・実施までのフロー・作業分担表を作成:杉田・池田・六反田

●更に当日の運営を補助してくれるメンバーを増員する。

作業分担表を作成、当日の運営をするにあたって、ビデオなどの記録・お弁当の手配や荷物の管理・講師や協力者の案内など、人手が不足していることが分かり、六反田ゼミ「福祉班」の生野慎一・関口

直之・山崎あゆ美, 及び住居学科2年で友人として井上由香の4名が協力してくれることになる。(以下, M研+4)

7月28日: 打合: 春日部市都市計画課・コアスタッフ・六反田

●春日部市都市計画課の後援を得る。会場が豊春地区公民館に決定。

企画書(案)などを持ってワークショップの内容について説明, 会場予約・地図などの資料提供・当日の人員派遣・ボランティア保険の申し込みなど協力していただくことになる。当初予定会場の中央公民館は既に予約が入っていることが確認でき, 急遽会場変更することになる。都市計画課・尾山さんが豊春地区公民館を仮予約してくださり, 早速会場の下見に出かけ, 大変環境の良い会場であることからその場で予約を確定する。参加者の作業場所としてのアトリエとその向かいの会議室を予備室・レクチャールームとして確保。

7月1日: 打合: 山田・コアスタッフ・六反田

●企画書最終版についての打ち合わせ。最終版をボイスカウトで配布していただくことになる。

7月1日: 顔合わせ: 田井・伊藤・六反田

●若手建築家・田井幹夫氏にワークショップへの協力を依頼。了解を得る。

\*同時に, 同じく若手建築家で, 中央工学校の専任講師をしていた竹池好古氏にも協力を依頼, 了解を得る。

7月4日: E-mail 山田→六反田→コアスタッフ

●ボイスカウト各団(第1団を除く)より, 参加希望者の集計が届き, 14名との連絡を頂く。

7月5日: 建築家・井坂幸恵氏のご意見を伺う: 杉田

7月6日-9日: 参加者向けの「研究員マニュアル」制作・完成: コアスタッフ・六反田

7月8日: 打合: 田井・伊藤・六反田: 竹池・六反田

●田井氏・竹池氏にスライドによるレクチャー, スケッチ(エスキスチェック)・模型制作の指導をしていただくことになる。

7月9日: 「研究員マニュアル」関係者に発送。: コアスタッフ

7月10日: 「研究員マニュアル」を山田牧師に届ける。また, 香田さん・城戸崎先生にも送付。: コアスタッフ

7月18日: E-mail: 山田→六反田→コアスタッフ

●山田牧師より16名参加とのお知らせ。名簿を頂き, それにしたがって, 参加者に「研究員マニュアル」を発送。

7月19日: 第1次リハーサル: M研+4

7月20日: 模型材料の買い出し: M研+4

7月21日: ゼミ中間発表: 作業過程について報告: 杉田

7月27日: 第2次リハーサル: 香田・鈴木チーム・M研+4・六反田

●香田さんを迎えてリハーサルのチェック・アドバイスをしていただく。

香田さんに共栄短大に来ていただき, リハーサルのチェックをしていただく。当初, 何回かに分けて春日部市のインフラストラクチャーについてM研の「博士」達が研究発表を行う予定であったが, 部屋の移動が煩雑なので第1日目の午前中, 作業の開始前にまとめて研究発表をすることになる。また, 子供達の作業班を4名前後で分けて, M研各一人と, 田井先生・竹池先生・鈴木チームで各班を担当し, きめ細かく一人ずつの相談役や模型制作の補助をしていただくことになる。インフラストラクチャーについての博士達の発表については内容を更に深めるとともに要点を手短かにまとめて聞き手に分かりやすくゆっくりと大きな声で話すこと, パネルを見やすくまとめ直すことなどが課題となった。

\*鈴木チームと伊藤で合同スライド・レクチャーをするために打ち合わせ。

7月28-8月3日: 準備作業: M研+4・六反田

●台本制作, 模型土台制作, 春日部市のインフラ発表パネル制作など。

実施までの作業分担と日程を一覧表化し, 各人自分の担当部分に集中作業。第2次リハーサルの結果を受けて変更した当日のタイムスケジュールの作成。また, 参加する子供達の人数が当日の欠席などで, 減る可能性もあるので, 全体としてひとまとまりの「まち」ができるように, M研のオリジナルパーツも作成しておく。



8月3日：最終リハーサル：香田・田井・竹池・鈴木チーム・M研+4・六反田

●ほぼ当日の運営が問題なく行える感触を初めて得る。



Fig. 1：最終リハーサル風景

8月4日：搬入，設営，段取りの最終確認：M研+4・六反田

豊春地区公民館（内井昭蔵設計）2階のアトリエを作業室，向かいの会議室を控え室兼レクチャールームとして設営する。アトリエ前の小ホールに受付を設営。アトリエには，初日作業用のスケッチセットの他，共栄短大より過去の学生作品の模型約20点及びパネル約10枚を展示する。会議室には，春日部市のインフラストラクチャーについてのレクチャーの準備として，説明用パネル（約15枚）のうち半分を設営。説明にしたがって入れ替えることにする。また，スライドの上映もあることから，暗幕を設営する。スライドプロジェクターは公民館にお借りして室内に準備しておく。会議用の机は片隅に寄せ，荷物台とする。子供達用の椅子は，あんまり緊張しすぎないように中央部に少し崩して置いておく。夜9時設営終了。



Fig2.搬入の夜

## 4. 実施当日の状況

### ①8月5日

9時30分に豊春駅に集合，会場へ参加者達を誘導する。9時45分受付完了。ワークショップ開始までに時間があつたため，著名な建築家・内井昭蔵氏が設計した豊春地区公民館の見学と共栄住居学科作品の模型の説明を行う。10時に予定通りワークショップ開始。この時点で，欠席が4名。1名遅刻も含めて参加者は12名となる。当初5グループの予定であったが，各3人の4グループに変更する。ワークショップの司会は2日間を通じて杉田が務めた。春日部市都市計画課から2名応援に来てくださる。休暇を取って香田さんも個人的に応援に来てくださった。ほぼ予定通りのタイムスケジュールで無事に初日を終了する。2台用意したビデオカメラが1台作動せず，1台で撮影することになる。

### <タイム・テーブル>

09:45 受付終了。研究員カードを配布。

MISSION #1「都市の現状を調査せよ」

10:00 未来のいる場所 PROJECT

司令説明：杉田

10:15 未来のいる場所研究所による調査報告

「春日部市のインフラストラクチャー」

\*電気：黒沢，ゴミ：池内，上下水道：小川，ガス：勝浦という分担で各自説明用のA1パネルを3～5枚使用して参加者に解説。調査の際にお世話になった春日部市水道課の方々が発表を聞きに来てくださる。



Fig3.小川博士の発表

10:45 運命の「くじ引き」

\*住宅・公園・学校・店舗のうち何をデザインするか、班分けをくじ引きで決定

11:00 「未来のいる場所」についてディスカッション

\*M研の研究員・各班のチーフと子供達で、それぞれ住宅や公園などの都市の「要素」が未来にどのようになっていくか、どんな風になったら良いと思うかというテーマでディスカッション。各班ごとに簡単に話し合ったことについて発表。予定よりも早く終了したので、予定よりもやや早く昼休みに入る。



Fig4.池田研究員と話し合いをする子供達

11:30-12:30 昼休み

MISSION #2「要素の未来形を構想せよ」

12:30 「アンビルド」(スライド上映)

\*鈴木・小田切・堀井・伊藤らによる自分の課題作品の紹介。どんなふうを考えてスケッチをして模型を作っていたか、できた後でどんなところが気に入っているか、などを各自の作品制作を通じて参加者達に説明し、午後以降の作業の参考となるようにする。



Fig5.スライド発表の準備をする鈴木チーム

12:50 「要素の未来形」スケッチ

\*再び、班毎に分かれ、チーフと午前中に考えたことをもとに、クラフト紙の上に「未来の形」をスケッチする。この間、田井氏・竹池氏・鈴木チームも適宜加わって、スケッチをすすめていく。チーフはこのスケッチの様子を見ながら、明日作成する模型の材料に適切な材料があるかをチェック。山田牧師が様子を見に来てくださる。

14:30 スケッチの発表

\*参加者が各自、自分のスケッチについてどんな事を考えて描いたのかを発表。言葉の足りないところはチーフが補う。思いのほか、自由な発想と個性的なスケッチが出てきて楽しい発表会となる。



Fig6.スケッチの発表風景

14:45 「ピラミッド→宇宙ステーション」

(スライド上映・講義)

\*田井先生による建築の歴史のスライド・レクチャー。現代に至るまでの歴史上の有名建築を紹介・解説。

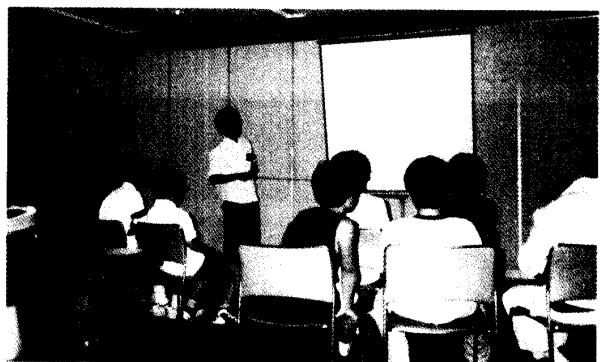


Fig7.田井先生の講義風景

15:10 初日解散・研究員カードを回収

\*スタッフは翌日のワークショップのために、会場を模型制作用に設営し直してから解散。



Fig8.初日終了後のスタッフ

②8月6日

9時30分豊春駅集合，2日目欠席の1名を除き，11名が揃う。初日がつまらなかつたら2日目は来てくれないのではないだろうかと恐れていたが，とりあえずほっと胸をなで下ろす。この日は，香田さん，春日部市都市計画課の方々が再び応援に来てくださる。2日目の予定通り10時にワークショップをスタート，杉田司会から司令説明の後，模型の制作についての簡単な説明をする予定であったが，参加者がどんどん目の前にある材料を使って模型を作りはじめたので，班毎の作業に任せる。午前中は模型制作に没頭している間にあっという間に過ぎ，昼食も各班で作業の切りのよいところで取るように変更。同じ理由で当初お昼休み直後に予定していた城戸崎先生のスライドも，作品発表会の後，という段取りになった。

<タイム・テーブル>

- 09:45 受付終了。研究員カードを配布。
- MISSION #3「都市の未来を作成せよ」
- 10:00 司令説明：杉田
- 10:10 模型制作作業開始。
- 11:00 「世界のまちからこんにちは」  
(スライド上映・講義)

\* 竹池先生が世界各国の民家や生活様式についてスライドを用いて紹介。子供達にいろんな生活様式と気候風土・民族性に適した住宅・集落・街の在り方があるのだということを知ってもらう。



Fig9.竹池先生の講義風景

11:20 模型制作作業に戻る。

- \* 昼食・昼休みは各自作業の切りのよいところで取ることにする
- \* 模型制作の困難な部分は，チーフ及び・指導に来ていただいた竹池先生・田井先生・鈴木チームの各メンバーなどの補助を得て，参加者達の模型が徐々に形になってくる。ほとんど全員没頭しており，会場は却って静かになってきた。香田さん・尾山さん・田井先生・小川も，欠席4名の穴を埋めるべく各自，模型制作に取り組む。また，当日の運営補佐としてきてもらった，井上・山崎も「未来のいる場所研究所」自体の模型を制作。お昼から来てくださった城戸崎先生にもご指導お願いし，先生のスライド講演は，作品発表会の後，ということでご了解いただく。



Fig10.模型制作風景

14:00 作品発表会

- \* 各自，自分の模型とスケッチを持って，チーフの助けを借りて作品発表。田井先生・竹池先生・城戸崎先生からコメントを頂く。各自の発表が終わった後，実はこの模型を集めて全部でひとつの街をつくることができる，という種明かしをする。最初は円形に並べた街，

次に直線状に並べた街を作り、いろんな建築が集まって都市の形ができるということを見せる。

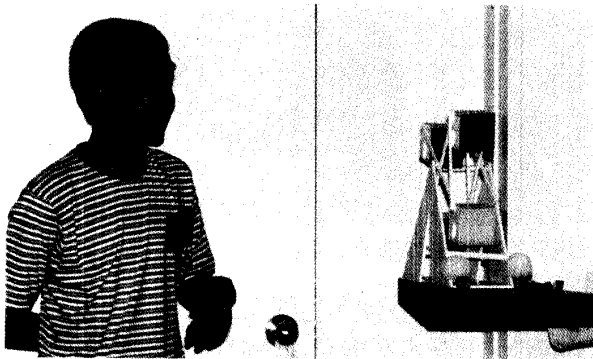


Fig11.作品発表風景

14:30 「ふわふわ・くるくる」

(スライド講演)

\* 城戸崎先生による近作のご紹介・解説。



Fig12.子供達と話す城戸崎先生

15:00 アンケート

15:15 記念撮影会・解散

15:30 作品撮影. 後片付け.

\* 作品の出来栄がよかったので、香田さんが交渉してくださり、豊春地区公民館エントランス・ホールでの展示をしていただくことになる。

後片付けと同時に展示の設営を行う。

## 5. 作品

Group 1 : 住宅 (チーフ・勝浦誠)

尾堤誠 四角い家

山畑千恵

斉藤啓 未来的高層住宅

Group 2 : 公園 (チーフ・池内久美子)

小島恵 池のある公園

関根理恵 大人公園・子供公園

川島咲穂 遊園地公園

Group 3 : 学校 (チーフ・伊藤洋人)

山浦弦 プールの学校

若山祐 ゲームの学校

川島光穂 図書館の学校

Group 4 : 店舗 (チーフ・黒沢英弘)

安藤信幸 六角形の地下店

金子宣也 三角形の大型百貨店

須藤啓太 観覧車のように動く店

Group X

香田寛美 未来の市役所

尾山誠 駅

田井幹夫 美術館

小川郁 美術館

M研 未来のいる場所研究所

短大チーム作品 (事前に作成した隠し作品)

杉田幸恵 未来型墓地

黒沢英弘 コルドバの住宅

エミリオ・アンバース設計 (案)

関口直之 ウォーキング・シティ

(アーキグラム)

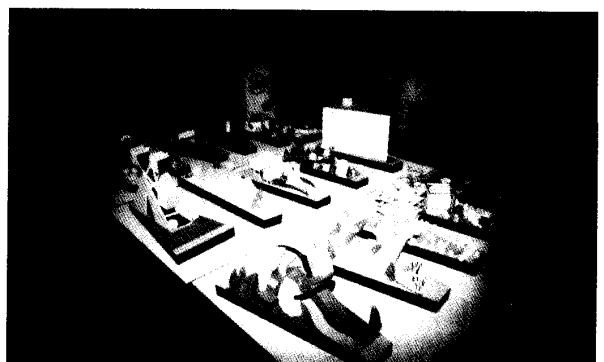


Fig13.全員の作品が揃う



Fig14. 円形都市

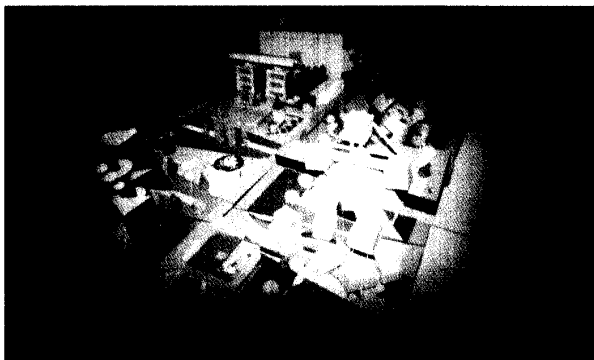


Fig15. 線状都市

## 6. アンケート結果

◆発表・スライドの中で何が一番楽しかったですか？（複数回答有り）

①未来のいる場所研究所調査発表	4
②「アンビルド」	5
③「世界の街からこんにちは」	4
④「ピラミッド→宇宙ステーション」	6
⑤「ふわふわ・くるくる」	6

◆MISSION の中で、何が一番楽しかったですか？

①MISSION #1	1
②MISSION #2	5
③MISSION #3	11

◆今回は会話を重視したイベントでしたが、いろいろな人と話してみてもうでしたか？

①楽しかった	11
②つまらなかった	0
③何も思わない	1
④その他	1

◆未来のいる場所調査発表はどう思いましたか？

①為になった	11
②為にならない	0
③関心がない	0
④その他	1

「いろいろ未来のことがわかるきがした」

◆未来のいる場所プロジェクトに参加してみて、良かった事悪かった事などを含めた感想を書いて下さい。（文章はアンケート用紙に記入されていた通りに採録しています）

「いろいろな人と話ができ、作品もしっかりつくれた。しかし、……絵が……。」

「自分でもけいをつくることがうれしかった。いろいろなことを知ることができてよかった。とても楽しかったです。」

「今回初めてこういった事をした。Mission #3は、たのしかった。がしかし！とっても事をこなすのに時間がかかった。もう少し時間があればもっといい“Park”ができたと思う。少しオトメチックになりすぎた。」

「もけいを思ったようにできてよかった。」

「いろいろな人と話し、いろいろな人におそわって始めてもけいをつくったけど作業がおそくなってしまった。またこんどこういうきかいがあったらぜひ参加してみたい。」

「いろいろな人と会話できてとてもうれしかった。もけいを少し、しっ敗したところがよかった。」

「今回はじめて、このプロジェクトチームをやってみたけど、2日間楽しかったので、また、やってみてみたいと思った。それに、もけいは、楽しかった。」

「いままでやったことのない事が体験できて良かった。また、いつかできたらやってみてみたいです。」

「いろんなことができるとおもしかった。悪かったことはとくになし」

「けいけんできないこと（初めて）けいけんできたことがあったので楽しかったです。またこういうことをやってみてみたいと思いました。」

「とても短い期間だったが、いろいろなことを学んだ。模型って楽しいね～！！？」

## 7. 印刷物・記録等

- ①第1次企画書
- ②第2次企画書
- ③第3次企画書（最終版）
- ④パンフレット・登録用紙

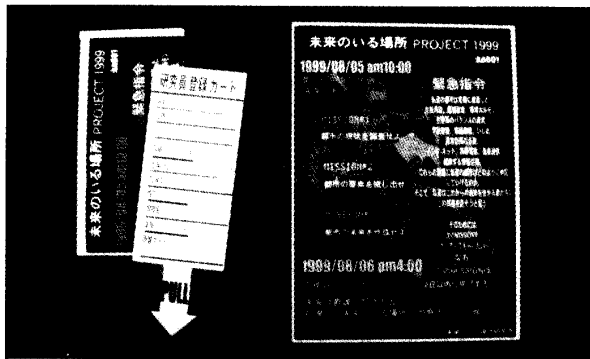


Fig16.パンフレットと登録用紙

- ⑤研究員マニュアル

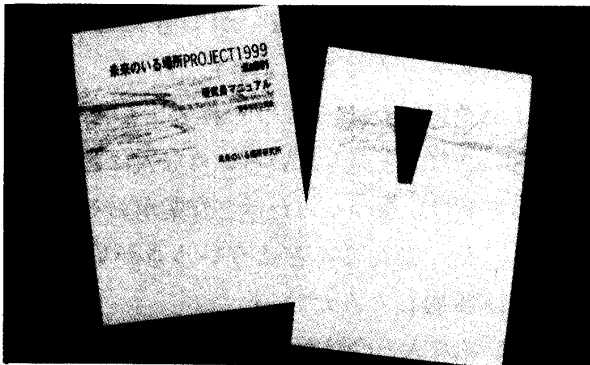


Fig17.研究員マニュアル

- ⑥当日の記録ビデオ
- ⑦当日の記録写真

## 8. 成果について

実施過程に見るように非常にあわただしく準備をし、多くの方々の協力を得てやっと実施に漕ぎ付けたというべきであるが、ワークショップに参加してくれた子供達の反応が大変手応えのあるものであったことに、企画として一応の成功を見たと考えられるであろう。このワークショップは、「子供達に都市・建築について興味を持ってもらう契機をつくる」という教育的

目的を持っているのだが、実はそれを実施している共栄短大の学生達にとっても、ある企画を立ち上げそれを社会の中で実現していくという教育的なプログラムであるという二重構造になっている。

また、アンケートの結果から見て、ワークショップの目的にひとつに挙げていた異世代交流もほぼ満足できるものであったといえるだろう。実は企画者としての共栄短大の学生と、ワークショップに参加してくれた最高齢の子供（中学2年生）は、5、6歳程度しか年齢的には離れていないのだが、その他、20代前半、30代前半、40代と協力していただいた方々も含めるとかなり幅広い世代が集まったといえる。実は、こうした異世代との交流は、このワークショップを実施した共栄短大の学生達にとっても事実上初めての経験だったので、異なる世代に属する多くの人々（それも専門家）からアドバイスやご協力をいただいたことは、大きな自信となったようである。現在の日本の社会では、小・中・高という10代の時期に家族・学校の先生以外に異世代と交流する教育的なプログラムはほとんどない。そうした面でも、予想以上にこの点については成果があったといっていいたいだろう。

はじめてのワークショップということもあり、実際に子供達が建築や都市という専門性の高い領域の課題にどれほどの反応を見せてくれるのか、まったく予測がつかなかったのであるが、非常に高い関心と、想像もつかなかったハイレベルの作品を2日という短期間に実際に創作していった姿を見ることができた。小学校高学年程度を対象とした教育的プログラムとして、建築・都市の問題を取り上げることは十分に可能であるという感触を得ることができた。

一方で、今回のワークショップは2日間限りの1回性のプログラムであったので、地域との交流あるいはまちづくりといった面では、まだまだ十分な成果を挙げたとは言い難い。今後も何らかの形で継続的にこうしたワークショップないし教育的なプログラムを継続していくことが重要になってくると思われる。来年度以降も、

実現の可能性があればぜひ、継続的な企画を作り上げていきたいと考えている。



Fig18.ワークショップ終了後のスタッフ